潮　流

欧州の挑戦

代表取締役社長　古谷　周三

欧州は回復に向かっているのであろうか、それともリーマン後の債務危機の後遺症から脱しきれず喘いでいるのであろうか。

指標面では 2013 年 4 月～ 6 月期実質 GDP 成長率はプラス圏に復し、生産も消費も緩慢ながら回復を見せ、最悪期を脱したようにも見える。ただし、その内容を点検すると多くの構造問題が横たわる。南欧中心に失業率は高止まり、国家・企業・家計の過剰債務はなお調整途上でディスインフレも進行し始めている。金融システムは脆弱で、緩和しても貸出金利は下がらず貸出も伸びない。手詰まりだ。

どうやら欧州の底離れはまだ見えない。本誌でも分析・報告のとおり、下方リスクを抱えての「底ばい」が当研究所の客観的見立てである。

昨年、こうした停滞に対して当の欧州、特にユーロ圏の金融関係者はどういう展望とシナリオ、苛立ちや不安を持っているのか、じかに顔色を見ながら聞いてみた。確かにエコノミストたちの歯切れはあまり良くなかった。経済指標の解説も「以前に比べればマシ」の類で、外需頼みのシナリオも多い。

面談してみての印象だが、経済の話題がいつか金融規制と新たな秩序・安全網の話に移り、それがガラス細工の仕組みであること、出口が遠いことに憂鬱な顔になる場面が多かった。日本では忘れられつつある感覚だが、金融機関の健全化対応が、信用収縮、特に中小企業の血流滞留を招くことが相当意識されている。銀行同盟の入口でクリアすべきストレステストは、「脱落者」の疑心暗鬼を伴う重いテーマになっていた。

中には欧州は米国投資銀行の「強欲」の被害者だ、と憤慨する人もいた。だが質が違う。米国の金融危機は無国籍の金融工学的市場が舞台だったが、欧州債務危機は「国」単位の地図的リスクの連鎖である。市場はその矛盾、単一通貨ユーロと凸凹な各国財政の矛盾を攻撃したのだ。対処法は、絡み合った国の債務と金融のリスクを慎重に遮断し、別々の安全網を構築して安定させるしかなく、困難で長い道のりを予想させる。それが憂鬱な顔の原因だ。

そこには新たな秩序作りに際しての共同体ゆえの独特の「苦しさ」と、しかし同時に「強さ」も感じられた。

説明者は「この難しさは他には理解できない」と語る。確かに米銀やメガバンクはそうだろう。しかし、実は我々にとっては身近な、手触りある内容だった。次に起こりそうなことすら想像できる。なぜならそれは、我々協同組織が独自の安全網を構築してきた道、経験した論点、課題、解決と瓜二つだから。

「苦しさ」はメンバーが独立したガバナンスを持つゆえの合意形成の難しさ、労力と時間の問題だ。風土や文化の異なる各国が各々議会承認を要する。メンバー間の異なる体力と負担の公平性、負の遺産の自助努力による処理、破綻処理ルールと意思決定プロセス、処理基金の負担等、俄かに判断しかねる問題だ。

一方「強さ」は、共同体ゆえの求心力、ギリギリ解決を探る粘り腰と「壊せない」という共通の意思だ。振り返れば長期流動性供給等応急措置とその間の異例処理、財政と金融のリスク遮断（ESM）、銀行同盟・監督一元化の枠組み等薄氷の交渉だった。破綻の危機は何度もあった。そこを最後は求心力が支えた。

金融規制は相変わらず逆風で銀行税のような「銀行叩き」も続く。「ビジネスモデルが作れない」との悲鳴もある。今後もユーロ圏各国間のアリとキリギリスのつばぜり合いは続くだろう。それでもユーロ圏は新たな秩序作りに前進する外はない。もう戻る選択はない。

元々欧州連合（EU）は市場の合理性や企業の成長という経済論理だけで結びついたのではなく、資源をめぐる紛争回避、石炭の共同管理構想に淵源を発する共同体としての政治的意思で結びついたのだ。それを思うと、研究所としてはむろん客観的分析に徹するが、個人的にはユーロ圏の挑戦が成就することを密かに願っている。それは市場（的な価値）に対する共同体の対抗・挑戦でもあるから。

ここに掲載されているあらゆる内容の無断転載・複製を禁じます